



等身の薬師仏

2日（金）に天声人語を引用した際、「桐壺源氏」という語について簡単に触れたが、実はもう一つ、あの天声人語にはツッコミ所がある。それは冒頭部分で、その部分だけをもう一度示そう。

千年近くも昔、たいそう読書好きの少女がいた。世は平安時代、書物は希少だ。少女は等身大の仏像を造り「あるだけの物語を全部読みたい」とひたすら願う。菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）と呼ばれる人で、その「更級（さらしな）日記」に愛書ぶりが詳しい

…この箇所のごとく問題かというところ、

「少女は等身大の仏像を造り」

の部分である。『更級日記』の原文では、「等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人間にみそかに入りつつ、京に疾く上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へと、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、」（訳：等身大の薬師仏を造って、手を洗い清めて、誰も見ていない時に密かに仏間へ入っては、「早く上京させて下さって、都にたくさんあるという物語を、全部お見せ下さい」と、一心不乱に床に額をつけてお祈り申し上げているうちに）

となっているのだが、常識的に考えて、この時数え年13歳だった作者が、どうやって等身大の仏像を造ったというのだろうか？

*

この部分を話題にした学者がいる。私の尊敬する筑波大学名誉教授の小松英雄先生であ

る。小松先生は、

「この少女、どんな材料で薬師仏を造ったのでしょうか。金剛仏や石仏はもとより、木彫でも、身の丈ほどもある仏像をひとりで造り、どこかに隠して、ひそかに祈りをしていたなどということが、ありえたでしょうか。この部分はフィクションだ、などという逃げ口上は、あまりに不自然な話にまでは通用しません。」（『伊勢物語の表現を掘り起こす』笠間書院、2010）

と指摘している。教科書にも採録され、誰もが分かった気になっている部分だが、丁寧に読み返してみるとこのような疑問点が浮上してくるのである。ちなみに、注釈書の中には（恐らくこの疑問を踏まえてだろうが）「造ってもらい」と意識しているものもある。

小松先生は、上記の部分に続けてご自分のお考えを書いていらっしゃるが、私はそれには賛成できない。この本は図書館にも入れてもらってあるので、興味のある人は、前書き部分に目を通してみるとイイだろう。私自身は、貴族の家の娘であれば、自分で直接造らなくても（つまり、人に造らせても）「私が造った」と表現することはありえると思うので、直訳なら「造り」、意識なら「造ってもらい」でイイのではないかと思っている。

『更級日記』は、古文専門家には好き嫌いが分かれる作品のようだ。夢見がちな作者の文脈は飛躍しがちで、きっちり読むのが難しいからかも知れない。私は We の第22号に猫の話引用した通り、かなり好きである。